

⇒ [お主サイトトップページ](#)

宮島芝居小屋と遊郭について

宮島の遊郭 元は小浦なりつれども 近代所かはりてより 新町となづく

江戸時代、幕府により富籤とみくじは禁じられていたが、実際には各地で行われていた。

広島藩においても大規模に行われた富籤は、一時は領内各地に許可されたことがあるが、後には厳島・尾道・御手洗・三次・帝釈などに限り、行われるようになった。

広島藩士であった小鷹狩元凱こたかりもとよしの書き残した「宮島の富籤」については次のように行われていた。^(註1)

- 一 合鑑紙あいかんがみと木駒もくこまを買う (一口ひとくち一〇もんめ匁)
- 二 合鑑紙に何か識別のための文言を書き入れ、検印を受けたあと購入者が所持
- 三 主催者側で同じ文言を木駒に書き写す
- 四 木駒を集めて桶に入れ、公開の場でさき錐つで突く
- 五 主催者が突き上げられた木駒の文言を読み上げると、同じ文言を書いてある合鑑紙を持っている者が当たりと判明する
- 六 売り上げの5%は藩の収入になる

内海交通の港町として栄えていた厳島社の門前町宮島では広島藩も町奉行の支配下として重要視し、遠近からの人寄せの為に浄瑠璃、歌舞伎、芝居等の興行を許し、春、夏、秋、の市立てを中心に富籤興行も許可されていた。富座で求めた諸口の合鑑紙あいかんがみと木駒に同一の番号、口名や思い思いの文句を書いて、合鑑紙は加入者が保管しており、木駒は桶に入れて指定期日に桶の小穴より木駒を突いて当り籤を決定していた。宮島では焚き木の大束だいそくが特産品であり、これを入札するという形で富籤が行われていたようである。このように広島藩においては、禁制の富籤はばかを憚はばかって物品を入札する形式をとっていた。

その物品は各地で異なり、宮島は大束だいそく (燃料として使用される薪まきのこと)・尾道は畳表、御手洗ぞうきは雑木、三次は麻苧あさお (麻糸)、帝釈は多葉粉たようこ (煙草)であった。^(註2)

※小鷹狩元凱こたかりもとよし:弘化3年3月8日(1846年4月3日)安芸国安芸郡広島城下白島九軒町出生。明治時代の軍人、政治家、郷土史家



(註1) 宮島の富 小鷹狩元凱「広島雑多集」『元凱十著』所収 「新修広島市史第4巻」358頁

(註2) 広島藩の富くじ 広島県立文書館 <http://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/41238.pdf>

藩の文教政策は人倫（君臣・父子・夫婦などの間の秩序）により、忠孝節義（忠誠、孝行、節操、義理）を実現するものであった。孝子烈婦（親孝行な子・節操をかたく守る女子。また、信念を貫きとおす激しい気性の女子。）の表彰が良く行われた。そして7代藩主浅野重晟（しげあきら）から8代斉賢（なりかた）にわたり編纂された「芸備孝義伝」・「芸備孝義伝拾遺」に顕された。^(註3)

宮島の遊廓

『巖島榎屋藤八後家さき』

芸備孝義伝 2編 75～76頁

榎屋 寛政5年（1783）

○巖嶋榎屋藤八後家さき
さきハ京都東洞院のうまれなり、身をうられて妓女となり、大坂の新町に在けるが、十六のとしこの巖嶋にくだりて榎屋某の内につとめけり、さだめの「年期もみちけれバ、榎屋藤八といふもの、妻となりしが、年三十にあまる頃、夫やミテ死しけり、もとより貧しく家にさだまれる業もなければ、日ごとに旧主榎屋へ行て、人の衣服を洗ひす、ぎなどして舅姑をやしなふ、舅ハ十とせばかりしてはてぬ、今ハ姑のミと思ひてや、いよくあつくつかへ力をよびやしなひける、されど糧ともしくつぎがたけれバ、姑をぐしなから、又旧主へ身をよせて、水をくミ飯をかきつとめ勞して姑をはぐむ、かくおちふれ」ぬることを人のつたへけるにや、都にあるゆかりの人より、しばらく帰りのぼるべきよし、しきりにいひをこしけり、されど姑の故を以てあへてのぼらず、旧主もあはれにおもひて、はし見せといふものをききにあつて、店のうしろに姑を置たり、かくて年ふるうちに、姑手足なへしびれて、二便にさへえゆかずなりけれバ、又うしろ町といふにひきしりぞきて、昼夜たすけやしなひける、その家のまづしく事あはれなるいふはかりなし、たはれ女の身の「はてとして、かく心の末とほりて、いとやさしくありがたきものなりけれバ、寛政五年癸丑の十二月銀貳百匁を給はりて矜賞をくはへらる、

^(註3) 「新修広島市史」第4巻358頁

宮島図屏風 さんせつ 松本山雪 (東京国立博物館蔵)

<http://webarchives.tnm.jp/imgsearch/search?q=%E6%9D%BE%E6%9C%AC%E5%B1%B1%E9%9B%AA>

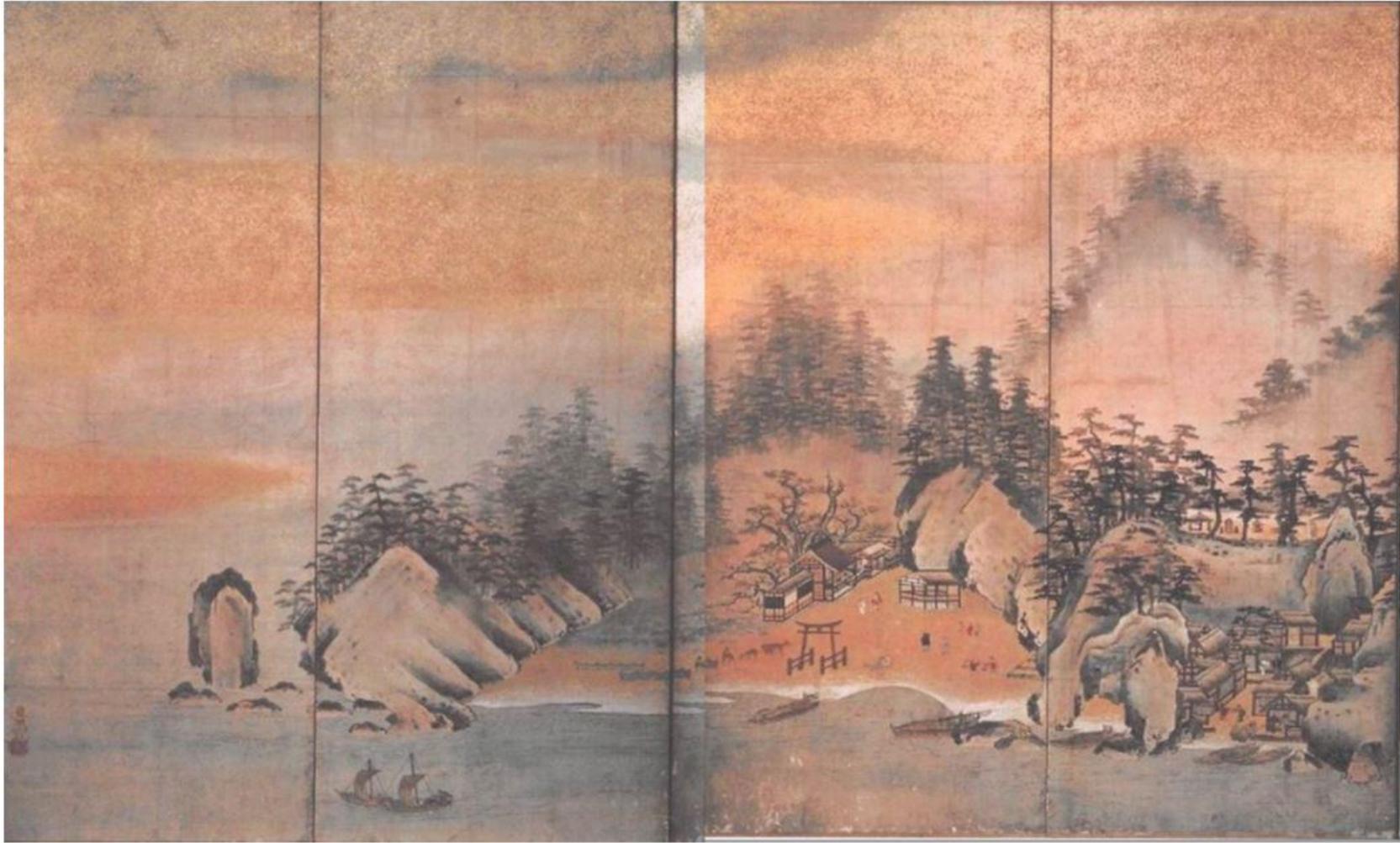
昭和 47 年秋、京都国立博物館 特別展覧会「平家納経と厳島の秘宝」において宮島図屏風が出展された。

この屏風には、江戸初期に宮島の市に芝居が来ていたことを証する史料となる、人形芝居や市立、小浦遊廓等が描かれている。



1	2	3	4	5	6
<small>ひじりさき</small> 聖崎 <small>ほうらいいわ</small> 蓬莱巖	長浜恵比寿 四座 <small>ひつじさる</small> 御殿 坤 向き、鳥居は <small>いぬい</small> 乾 向きなり。 <small>こうらゆうかく</small> 小浦遊廓 寛永年間(1624～43)に広 島城下から新町に移され るまでは遊廓は小浦に置 かれていた。	東町の様子	市立の様子 参道にびっしりと仮 屋が建ち並んでいる	松本山雪の画風は個性 的で本殿の建物の配置 は書換えられている。 本殿後ろの <small>たけやらい</small> 人形芝居の 外側を竹矢来で仕切 り、正面中央にやぐら つきくぐり戸がある	西町の様子 左中央部には、大永 3年(1523)僧、 <small>しゅうかん</small> 周 歆により建立さ れた多宝塔(高さ 15.6 <small>メートル</small>)が描かれ ている。

(宮島図屏風 6 図連結加工図)



1

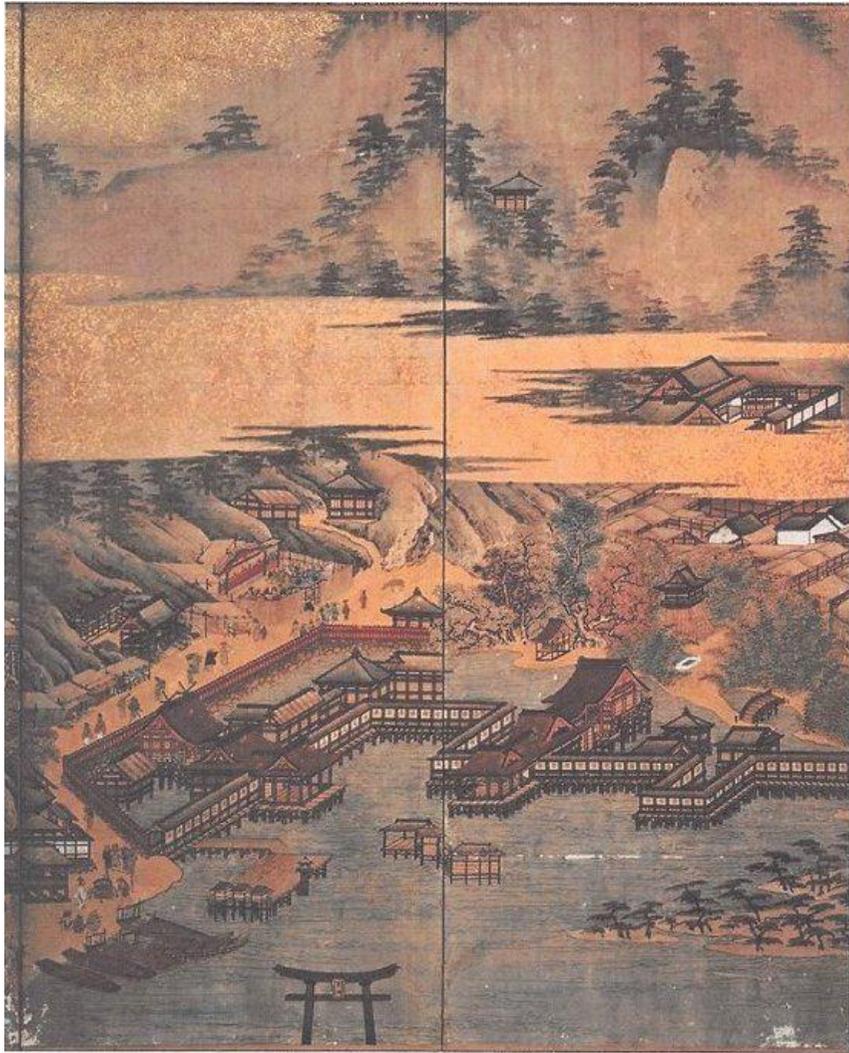
2



3

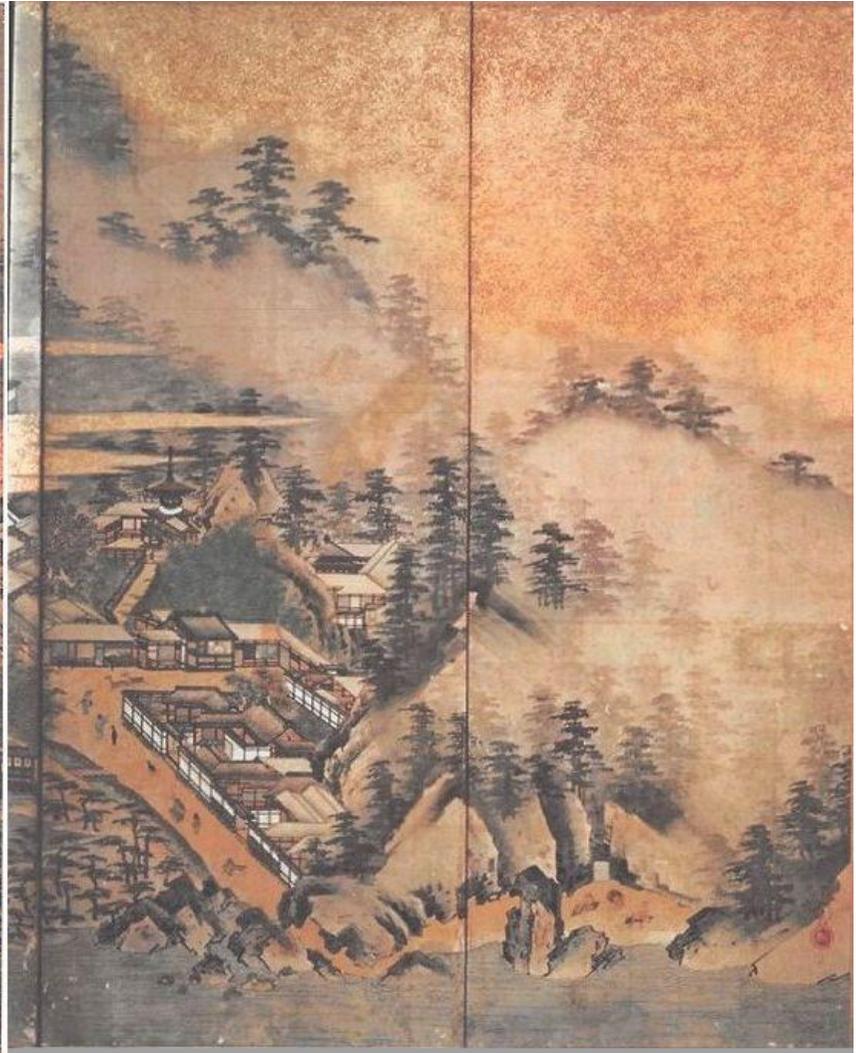


4



(中央部)

5



6



5 図の人形芝居部分拡大

松本山雪^{さんせつ}は、生年不詳、没年^{えんぼう}延宝4.11.23（1676.12.27）。

江戸前期の絵師。本名は恒則。初名^{しょめい}は庄三郎。岨巖^{そてん}とも号した。近江(滋賀県)の出身だが、寛永12(1635)年に松山藩(愛媛県)松平家初代貞行に従って松山に移り、2人扶持を得て御用絵師となる。画馬を得意としたほか、「宮島図屏風」(東京国立博物館蔵)などの景物画も描いた。養子山月が跡を継いだ。 <参考文献>松山市立子規記念博物館『松山の藩絵師展/図録』

松本山雪の画風は個性的で、大体の状況は実際であろうが、細部を見ると忠実ではない。

◆2図には山雪が描いた年代を推定するヒントがある。小浦^{こうら}という海岸そばに遊廓が描かれている。草葺屋根が十五棟ほどあるが家数7・8軒か。格子の外から覗いている遊客や路上で客の手をひっぱって連れ込もうとしている引手女など、廓^{くわ}風景である。遊客は舟通い。寛永年間(1624～43)に広島城下から新町に移されるまでは宮島の遊廓は小浦に置かれていた。

『色道大鏡』(延宝六年(1678)成稿^{せいこう})に「宮島の遊廓、元は小浦なりつれども、近代所かはりてより、新町となづく」とある。新町へ所替えになった年代については、『諸国色里案内』貞享五年板に「十六七年も以前まではかうらといふにありしが、市の時分人くんじゅ(群集)をなし、物いひ度々有し故御法度あり。其間^{そのま}は壱年許も舟中にてしのびのうりかひいたせしが、其後今の大坂町にさだまりぬ。」とある。

寛文11年(1671)か同12年まで小浦に遊廓があつて、それが1年ほど禁止されて後、新町に所替えをして許可された。新町遊廓は延宝元年(1673)か同二年にはじまったことになる。

『色道大鏡』には延宝4年(1676)に調査した新町地図があるが、それを見ると新町への出入は一方口の門からだけで、奥はふさがれて行きどまりとなっている。

◆4図は市立の様子を描いたもので、参道にびっしりと仮屋が建ち並んでいる。そのうしろの岡に天正15年(1587)豊臣秀吉が安国時^{あんこくじえい}恵瓊に命じ、戦没者の供養として毎月千部^{てんぶく}経の転読^{てんどく}供養をするために建立した経堂(千疊閣)、そして応永14年(1407)建立の五重塔(高さ28^{ふた}尺)が描かれている。

◆5図は本殿の建物の配置は書き換えられている。ことに、本殿の平舞台の中央部から海中の大鳥居へまっすぐ突き出ている火焼前^{ひたきき}が、90度左へ折り曲げて描いてある。関ヶ原合戦ののちに広島藩主となった福島正則が慶長10年(1605)神事として能を興行する為に常設の能舞台が造営された。

そして福島改易後藩主となった^{あさのつななが}浅野綱長により延宝8年（1680）、現在の舞台と橋掛・楽屋が造営された。能舞台の位置はもっと右が実際である。

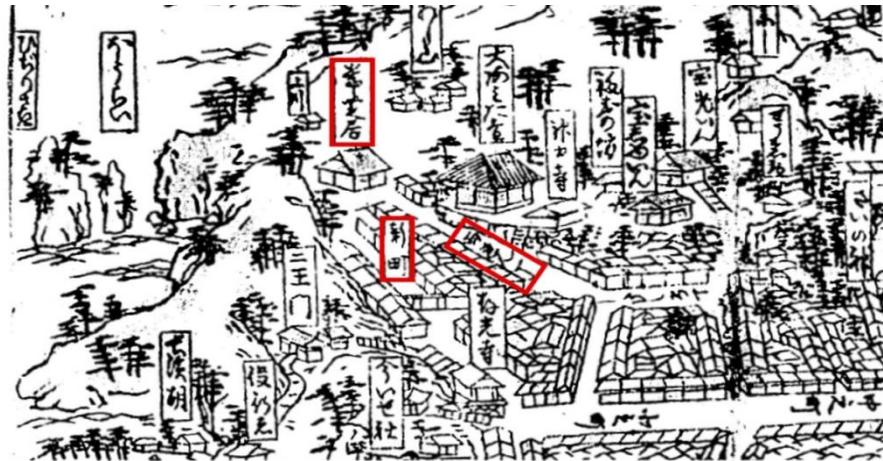
本殿後ろの**人形芝居**の外側は、正面と左右をむしろ^{たけやらい}囲いの竹矢来（竹を粗く縦横に組んで垣としたもの）で仕切り、正面中央に^{やぐらつ}櫓付きのくぐり戸がある。内は露天に地面のままの客席で、観客が地べたに座って見ている有様が描かれている。舞台は屋根があるが、^{いちだな}市店と同じ描き方なので^{いたぶき}板葺であろう。正面には立派な唐破風がついて、江戸初期の人形芝居はこんなところに^{からはふ}美しい装飾を見せるのが習いであった。舞台の中は人形浄瑠璃専用の手摺舞台形式で四つの人形が登場している。囲いと客席、舞台と人形の形式から寛文・延宝（1616－80）にふさわしい。^{註6}

また2図の小浦海岸の遊廓から、松本山雪の宮島図屏風は、寛文年間（1662－1672）頃描かれたものと推定される。

「宮島の芝居小屋」角田一郎によれば、山雪の芝居小屋は、^{いちだて}市立てと芝居興行が終われば取り壊される掛け小屋であった。宮島の遊廓は寛永年間（1624－43）に広島城下から小浦へ移され、寛文十二年（1672）頃、新町へ所替えされている。」

◆6図の左中央部には、大永3年（1523）僧、^{しゅうかん}周歆により建立された多宝塔（高さ15.6^尺）が描かれている。

◆7図の木版「安芸巖島図会」には、西蓮町の常芝居が描かれている。



料飲旅館街の西蓮町と遊廓新町は背中合わせで遊廓の奥へ抜けて右に折れると富座があり、その建物は芝居と共用であった。

常芝居/ 新町/ 西蓮町

7図木版「安芸巖島図会」部分 寛政7年(1795) 個人蔵
(参考「巖島の祭礼と芸能」原田佳子著 327頁より引用)

^{註6} 宮島の芝居小屋 角田一郎 295頁 「宮島歌舞伎年代記」蒲田著 所収

宮島に常設の芝居小屋ができるのは天明（1781－89年）の頃である。宮島奉行の屋敷近くの大町の「ナベカリヤ芝居」と新町の富籤興行が行われる「大東入札場所」と同時に、芝居興行が行われる「常設の芝居小屋」であった。

文化八年（1811）の「安芸国巖島細見之図会」には本社東に「芝居」と描かれている。寛政から文化にかけて御垣ヶ原に本格的な常設の大劇場が建てられたのであろう。

「芸州巖島図会」上巻 408頁 「歌舞伎芝居の圖」5行～の「西海第一の劇場」は巖島本社東の御垣ヶ原の芝居仮屋周辺のにぎわいを表している。また、400頁「遊女能を觀みに出るいづ図」に描かれた芝居小屋は、新町の富座（大東入札場所兼芝居小屋）であろう。

明治維新後、藩の支援を失った宮島芝居は、明治元年の富籤の禁令で経済的に苦境に立つ。

明治5年三月市で芸子芝居を興行中に出火全焼。嘉永三年（1850）の大風で倒壊した大鳥居が、明治8年の再建を機に有志により劇場・明神座（巖島大明神からとった名付けか？）として御垣ヶ原に再建。同年8月、明治4年以来休座の宮島歌舞伎が5年ぶりに興行された。

明治18年（1885）、劇場は解体され、これをもって宮島歌舞伎は終焉した。北の町へ移築された劇場は名を明神座と呼ばれ、大正の末、宮島劇場と改称、映画の上映をしていたが、昭和35年（1960）に電々公社に売却され、宮島の芝居小屋は完全に消滅した。

山翁社の前の御垣ヶ原の大劇場跡地には、明治28年に宝物陳列場が建てられた。その後昭和9年に宝物館が国宝西回廊を出た所に造られ、現在、大劇場跡地には社務所が建っている。

「しきどうおおかがみ」 新版『色道大鑑』

江戸時代の遊女評判記「色道大鏡」藤本（畠山）箕山〔1628-1704〕著、1678年序、18巻より成る翻刻の新版『色道大鑑』刊行
会編 2006年刊には、当時の遊廓 25か所を列挙している。（341～344頁）

これは江戸初期の全国遊里・遊郭を京都の箕山が 30年かけて踏破し風俗の実態を記録した遊里百科全書の翻刻である。

- 1 京島原（[嶋原](#)）
- 2 伏見夷町（[撞木町](#)）
- 3 伏見柳町（[中書島](#)）
- 4 大津馬場町（[馬場町](#)、現在の[大津市長](#)等）
- 5 駿河府中弥勒町（[府中宿](#)、現在の[静岡市葵区](#)駒形通5丁目）
- 6 江戸三谷（[吉原遊郭](#)）
- 7 敦賀六軒町（現在の[敦賀市](#)栄新町）
- 8 三国松下（松ヶ下、現在の[坂井市](#)三国町）
- 9 奈良鴨川木辻（現在の[奈良市](#)東木辻町・鳴川町）
- 10 大和小網新屋敷（現在の[橿原市](#)小網町）
- 11 堺北高洲町（現在の[堺市堺区](#)北旅籠町東）
- 12 堺南津守（現在の[堺市堺区](#)南旅籠町）
- 13 大坂瓢箪町（[新町遊廓](#)）
- 14 兵庫磯町（現在の[神戸市兵庫区](#)磯之町）
- 15 佐渡鮎川（現在の[新潟県佐渡市](#)相川会津町）
- 16 石見温泉（現在の[島根県大田市](#)温泉津町温泉津稻荷町）
- 17 播磨室小野町（現在の[兵庫県たつの市](#)御津町室津）

- 18 備後鞆有磯町（現在の[広島県福山市](#)鞆町鞆）
- 19 広島多々海（現在の広島県[竹原市](#)忠海町）
- 20 宮島新町**（現在の広島県[廿日市市](#)[宮島町](#)新町）
- 21 下関稲荷町（現在の[山口県下関市](#)赤間町）
- 22 博多柳町（現在の[福岡市博多区](#)下呉服町）
- 23 長崎丸山町寄合町（[丸山](#)、現在の[長崎市](#)丸山町・寄合町）
- 24 肥前樺島（現在の長崎市野母崎樺島町）
- 25 薩摩山鹿野田町（[山ヶ野金山](#)、現在の[霧島市](#)横川町上ノ山ヶ野）

20 番に、安芸国宮島 号新町について 6 行の由来と延宝 4 年（1676）の「宮島新町之圖」が記されている。（次頁）

第廿 安藝国宮島 新町 拡大

第十冊 大か、み

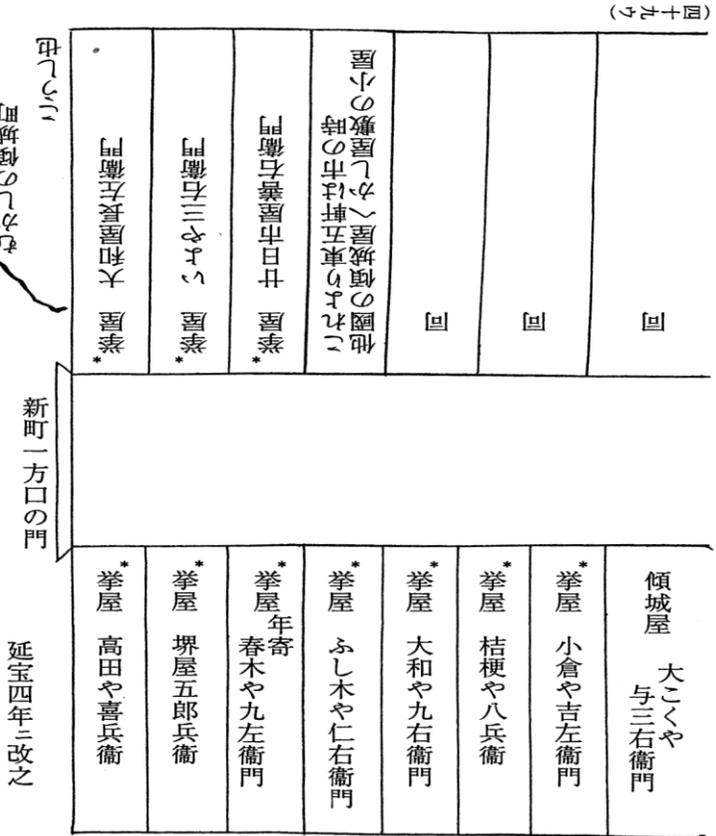
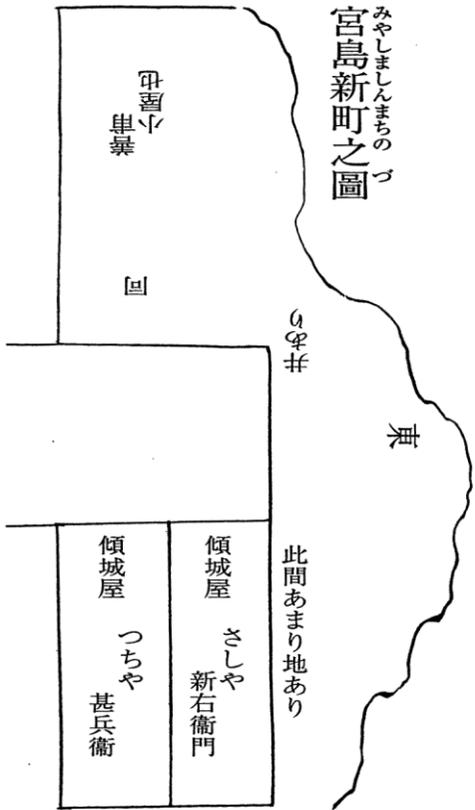
第十七 安藝国廣嶋 多々海

多々海の傾城は、いたく小郭にして、住居さだまらず。いかんとなれば、他郭の女を、或は半年、或是一年ときはめ預りをくか、又は所にてはかゆかぬ女を他國よりさし下し、暫をける旅女なれば、入かはる事はやし。且此所へは、龜女のみを遣すなれば、遊興をもとむるまでの事なし(四十八ウ)

第廿 安藝国宮島 号新町

宮嶋の遊郭、元は小浦なりつれども、近代所かはりてより、新町となづく。北は濱手なり、東の山の根にあて、遊郭を構ふ。郭の南裏に、阿弥陀堂あり。これを大御堂といふ。小浦のかた乾にあたりて、荒恵比須の社あり。當所、市の比ほひは、諸國より人おほく群るゆへに、他郭より傾城をさしくだして、こゝにあきなふ。地傾城は、田舎なれども、輒よりは風儀はる(四十九ウ)かにまさりて、躰みにくからず。僅の多少はあるべれど、當郭は傾城の數三十人と、ちかき比よりさだめられし。拳屋數合十軒、天職廿七匁、小天神廿二匁、圍職十七匁、半夜八匁。昼がし有。夜格子は酉半刻より亥上刻まで出す。

みやしましんまちのつ
宮島新町之圖



宮島新町之圖 拡大

延宝 4 年 (1676)

第廿 安藝國宮島 新町について

宮島の遊廓は、元は小浦こうらであったが、近代所代わり新町しんまちとなづく。

北は浜手

東は山の根に遊廓を構う

廓くるわの南裏に阿弥陀堂あり、これを大御堂おおみどうという

小浦のかた乾いぬい（北西）にあたり、荒恵比寿の社有（長浜）

市の日は諸国より人多く、他国の傾城けいせいに貸し出して商う（5軒）

輶ともよりしきたりはるかに勝り、躰からだみにくからず

当廓くるわは傾城けいせいの数三十人と定められ、拳屋数あげやのかず^(註7) 合あわせて十軒、天職てんしよく^(註8) 廿七匁、小天神廿二匁、圍職いしよく 十七匁、半夜はんや八匁、

昼がし有。

夜格子は酉よごうしの半刻とりより亥いの上刻まで出す。

酉の刻（午後5時から午後7時）、亥の刻（午後9時から午後11時）。

1刻（2時間）、半刻（1時間）、1刻を上・中・下に三等分（それぞれ40分）。酉とりの半刻いより亥いの上刻は、午後6時より午後9時40分となる。

(註7) 拳屋（あげや） 傾城けいせいを挙げおく宿。置屋から芸妓・娼妓しょうぎを呼んで遊ぶ処。料理は仕出し屋から取る。

(註8) 天職（てんしよく） 天神のことなり。

全国遊廓案内 日本遊覧社 昭和5年

「嚴島町遊廓について」

貸座敷 4軒

娼妓数 14人 宮城県、鹿児島県出身が多い、

寫真式 かげみせ 陰店（くぐりを入れて、表から見えない処に店を張っている）は張っていない。

居稼ぎ制 娼妓が抱え主の家で客を取って稼ぐこと。

（置屋、揚屋と専門に営業している処で、娼妓は置屋から揚屋へ送り込まれる「送り込み制」はしない。）

おきや 置屋とは、げいしや 藝妓、しやうぎ 娼妓を抱えて置く家

あげや 揚屋とは、置屋から藝妓、娼妓を呼んで遊ぶ処、料理は仕出し屋から取る。

宿泊制 廻しは取らない（一人の娼妓が二人以上の客を取って、順次に客から客へ廻って歩くことはしない）。

費用 おきま 御定り（1泊）6圓

（どこの遊廓でも御定りが標準、または並の意で、一番勉強してある）

1時間 1圓50錢

いずれも晝の物だいもの（通し物とも云い、客席に出す、酒、肴、茶菓等のこと）は附かない。

妓楼（4軒） 一富士楼・三日月楼・生駒楼・曙楼

げいしや 藝妓は呼べない

りよう 俚謡（民謡） 「安藝の宮嶋廻れば七里、浦は七浦七恵比寿」

名物 杓子、おぼん 御盆が名物で参詣人の必ず買って歸る品物

（参照：[近代デジタルライブラリー 全国遊廓案内](#)）

「宮島町史 資料・石造物」

平成5年(1993)刊

写真撮影は、昭和59年(1984)より実施。

493・494頁掲載

弥山道石敷き道 3基の石柱

◇奉寄附拾間 當所

◇奉寄附拾間 當所新町胡子屋

瓶子屋

槌屋

肥前屋

◇奉寄附拾二間 當所 五間福原屋口次

三間対馬屋善兵衛

廿日市 二間小倉氏

二間福島屋利助

一基不明か



10年前の平成17年（2005）9月6日の台風14号の土石流により歩道が流出し、石柱から上の石畳道は残っているが土石流で流れた一部の石畳道が別の場所に付け替えられた。



島の遊女が寄進したという石畳道



土石流土石流で流れた一部の石畳道が別の場所に
付け替えられた

⇒ [お主サイトトップページへ](#)